

留学報告書

ボアジチ大学（トルコ・イスタン
ブール）

静岡県立大学 3年国際関係学部国際関係学科

私のトルコでの留学生活は毎日毎日新しいことに直面することができる刺激的で色濃いものでした。また私にとって、この留学体験はトルコにいた期間ではなく、その交換留学に応募するために TOEFL の勉強をひたすらしていた半年間も大切な思い出です。だから今回のこの留学体験レポートでも、まず最初に留学へ行く前の日本での準備期間について触れたいと思います。その後、トルコでの大学での体験を学内の授業などの体験、そして友人たち交際などの学外での体験の二つについて話したいと思います。ですので本レポートでは、①留学への準備、②学内での体験、③学外での体験、の三つに分けて報告をしようと思います。

まず、私がこのトルコ留学を本気で行きたいと考え、英語の勉強を始めたのは一年次の6月ごろのことです。今でもよく覚えているのは、当時静岡県立大学に入学してまだ2か月弱しか経過しておらず、周りの友人たちも友達作りや人生初めてのアルバイトに一生懸命という空気が自分の周りに強くあったことです。そんな中、できるだけ早く留学へ行きたいと考えつき、佐藤先生の研究室に相談に行ったのは7月でした。

自分の当時の英語力では圧倒的に留学の応募基準に達しておらず、英語の上達と TOEFL のハイスコア獲得必須であったため、せつかく3か月前に大学受験が終わったにもかかわらず、毎日図書館に終了時間の10時まで図書館で一人英語の参考書に向き合う生活をしていました。

大学受験と大きく違ったのは自分と同じ境遇の友人などが一人もいなかったことです。図書館で一人勉強しているとき、自分のやっていることは本当に自分のためになるのか、もしも TOEFL 本番でいい結果が出せなかったら半年の英語の勉強は完全に無駄になるのではないかと、そんなような思いを持ち続けながら参考書と向き合っていました。何度かの TOEFL 試験ののち、最後の結果も期待するほどの高得点は取れず、それでも何とか人数制限に滑り込む形で留学希望が叶ったときは本当にうれしかったです。

後でも少し触れますが、このほぼ一人で半年間英語の勉強を続けられたこと、そして曲がりなりにも結果をもらえたという経験はとても貴重な経験になったと思います。

そのような経緯を終え、何とか2017年の9月からトルコのイスタンブールにある、ボアジチ大学 (Boazici University) に約10か月間の留学に行くことができました。留学に行く前からある程度覚悟していたことですが、やはり現地での大きな問題は言語、自分の英語能力の低さでした。もともと英語能力上達を一番の目標として留学した私でしたが、現地についた当時はほとんど絶望的といってもいいほどに英語の会話、特にスピーキングができず、とても苦しい思いを最初の3か月間しました。

またここからは具体的な学内での経験、授業などに関することですが、やはり最初の数カ月は授業に苦しい思いしかなかったように思います。もちろん授業の形態はディスカッション形式や大きな講義室でも生徒が活発に挙手をする教室の空気など日本の大学との授業との違いはとても魅力でした。しかし、そんな刺激的な授業でも自分のリスニング能力がついていかず、教授が話していることの半分もわからない、教授や学友に話を振られて

もスピーキング能力がついていかず **I have No Idea** としか答えられない、などとても悔しい思いを多くしました。

また大きく大変、という意味でショックを受けたのはやはり、課題、もしくは予習の多さです。私が前期に取っていた授業の一つに「**Diplomatic History sec2**」というものがありました。この授業はフランス革命後から冷戦期終了までの世界史（とくにヨーロッパ史）を詳しく見ていく、という授業内容だったのですが、先生が用意するテキストを毎週80ページから100ページほど読んで火曜日の授業に参加しなければならず、毎週日曜、月曜は死ぬ思いで寮のスタディールームに籠っていました。

しかし今思い返せばその予習に明け暮れた前期の経験も、自分でもどうにか工夫と努力を絞ればそれまでの自分では予想もつかないような量の課題、仕事もこなせるのだ、という自信に繋がりました。

また一つ、ボアジチ大学の授業を経験したことで得られた大きなものは自分が英文学にかなりの興味を持っているということを知れたことです。これは自分が今静岡県立大学で専攻している学部とは大きく異なるので自分の大学卒業に直接つながるわけではないのですが、それでも今まで自分が知らなかった自分の新しい好きなことを知ることができたのは大きな喜びだといえます。

この喜びを得られた理由はボアジチ大学の自由な授業選択システムです。ボアジチ大学に留学する留学生は自分が一学期の間に受ける授業は自分の選択した学部の科目を2つ以上選択すれば、ほかの授業はたとえ他学部の授業でも簡単に履修手続きをすることができます。私はこのシステムを活かし、いくつか他学部の授業を履修していたのですがその一つに英語を上達させたい学生のための **Advanced English** という英語の授業を前後期とも履修していました。

この **Advanced English** の授業の中で私はいろいろな時代、形態、作者の英文学を読み学生やアメリカ人の先生と話しました。時にはエドガー・アラン・ポーの詩を、時にはギリシャ神話を、時にはシャーロックホームズの小説を授業を通して深く読むことで日本語での表現とは違う方法でのある意味回りくどい英語の言い回しが自分にはとても「面白い」と感じるということを発見することができました。

このように、ボアジチ大学のフリーな授業選択形態によって私はまた一つ自分の人生を楽しくさせてくれるものを見つけることができました。

ボアジチ大学での授業についての経験を総括をすれば、苦しい思いや悔しい思いをたくさんしましたが、それ以上に得られたものは大きかった、と言えます。この学内での経験の総括に最後に付け加えたいのは、結局最後まで教授の50分間で言っていることが100%聞き取り、内容を完璧に把握することはできなかった、ということです。最後の最後の授業まで、最初期と比べれば小さくなったものの、授業を完璧に把握できないことへの悔しさというものは消えませんでした。この話はこの報告レポートの総括でもう一度触れたいと思います。

さて、イスタンブールでの学外での活動についてですが、正直に言えば私はイスタンブールで何かプロジェクトに参加したわけでもボランティア活動に参加したわけでもありません。またコレ、といった部活への正式の参加があったわけでもありません。今振り返れば本当にヨーロッパ諸国などから来たエラスムスの留学生の友達や、現地のトルコ人の友達と毎日遊んでいただけのように思えます。ただそのただ友人たちと過ごしたトルコでの日々が私の中では大きな留学の思い出の一つとなっているのでこの報告書にも主に日々の友人たちとの交際のことについて書きたいと思います。

まず、ボヤヂチ大学のニットクラブ（通称ニット会）について話したいと思います。ニット会のトルコ人たちはかなり日本語のレベルが高く、日常会話なら何の心配もないというほどで私もトルコに到着後数日は彼らに身の回りの準備のサポートをしてもらっていました。しかし段々とトルコでの生活に慣れていった私はほかのヨーロッパやアジアの国から来た留学生たちとの交流にも参加するようになっていきました。そしてここがおそらく私が一番留学で悔しい思いをした場面です。

前述もしましたが、私はトルコに来てから数カ月の英語のレベルは会話できる程度には程遠く、そしてそれはもちろんほかの留学生たちと一緒にいる時ももちろん例外ではありませんでした。楽しく会話をしたくても向こうが何を言っているか聞き取れなかったり、聞き取れてもこちらが言いたいことをすぐ英語で話せず、空気が固まったまま違う話題になったりと、たくさんの歯がゆい思いをしました。また特に悔しいと感じたのは段々とそのような状況になるのが怖くなってきて、せっかく留学生の友達が遊びに誘ってくれてるにも関わらず、あえて「用事がある」などと嘘をついて誘いに乗らなかった時です。今でも時折思い返しては、あの時友達の誘いをすべてちゃんと乗っていたら、と後悔することがある程です。

それでも段々とその友人たちとの会話のレベルにも慣れてこれたのはほとんど前期が終わるころだったと思います。もちろん僕が前期の後半になってやっとまともになった理由は、うまく会話もできない僕を前期の間誘い続けてくれたほかの留学生、またはトルコ人の友人のおかげです。今思い返せば、もっと早く上達したかったという思いも強いですが、それでも本当に多くの人に支えられ、受け入れられ、どうにかこうにか留学の前期を終えられたのだなあと思います。

交友関係で悔しい思いをした話はこれくらいにしてこのパートの後半はトルコで友達と付き合う中で面白いと思ったこと、興味深かったことなどについて話したいと思います。

トルコでの友人づきあいの中でやはり一番面白いと感じたことはトルコのチャイの文化です。友人から聞いた話では、トルコでは多くの人が熱々のチャイ（トルコのお茶）を一日中かつ一年中飲んでいるそうです。しかもチャイを飲みながら友人たちとの歓談を交えるのがトルコ流だそうで、最初は口にもつけられないような熱々のチャイが毎回飲まれるのは、チャイが熱ければ熱いほど覚めるのに時間がかかり、その分だけ長く友人や家族と会話ができるからだそうです。たしかに多くのトルコ人（少なくとも僕の友人たち）はみ

んなおしゃべりが大好きで、授業と授業の空きコマ、休日のちょっとした時間など、時間があればチャイに誘ってくれました。このように本当に国民柄と文化が強くマッチしているのはとてもおもしろいと感じられるトルコの一面でした。

トルコ人以外の留学生たちとの交友では、これはまじめに話しますが、本当に酒はコミュニケーションにおいて大事なもののだな、と感じたことがこの留学で得られた面白い経験だなと思います。というのも、留学生の人たちと遊ぼうとなったとき大抵はクラブかバーに連れていかれ、飲み、話し、踊り、と日本での友人づきあいとは少し違う友達との遊び方に最初は少し戸惑い、段々とそれが楽しく思えていきました。授業では絶対に理解のできないリアルな「海外」を一番彼らとの遊びの中で見つけられたのだと感じます。

あと一つ交友関係の話で出しておきたいのはルームメイトの話についてです。僕ら日本人留学生はトルコに到着してから最初の数週間は同じ部屋でのルームシェアをしていましたが、途中からきちんとほかの寮生たちと同じように部屋をそれぞれ振り分けられ、僕にもアイベルクという名のルームメイトができました。おそらく僕が英語がうまく話せなくても何とかへこたれずに一年やっていけたのは彼のおかげです。彼も僕と同じか少し上手程度であり英語が話せなかったのですが、それでも優しく、トルコ人らしくおしゃべりで趣味もあったのでよく二人でお互い辞書を片手にくだらないおしゃべりや少しまじめな話しを何時間も話しました。おそらく僕がこの留学の中で一番話していて気が楽だったのは彼だと思います。ルームメイトがだれになるか、気の合うやつか、なんてことは完全に運ですが、私はルームメイトがアイベルクであったことに本当にラッキーだったと確信して強く言えます。

段々と留学生やトルコ人の友人たちと仲良くなっていき、アイベルク（ルームメイト）とも将来の話なんかをするようになって段々と感じていったことは外見や声、言語を大きく違うけれどそれでも一人の人、将来について悩んだりする一学生としては日本人と大きく違うわけではないのだな、ということです。留学する前までは海外とは本当に自分が住むこの日本とはまったくもって異なっていて、きっとそこに住む人々も全然自分や自分の周りの日本人とは違っているのだろうな、という気持ちを抱いていました。現にそれは少し正しいことだとも思います。やはり無効に10か月滞在する中でありありと日本人とのいわゆる国民性の違いのようなものを見せつけられることも多かったです。それでも友達づきあいを経て、留学後半で思っていた考えは「やはりそこまで大きく違わない」という気持ちでした。言い換えれば今までずっと遠くに思っていた「海外」がかなり身近なもの、そこまでは言わなくても思ったほど遠いわけではないもの、に変化していったようでした。そしてこの「海外」に対するイメージの変化が私が学外で経験できた一番大きなものであるように思えます。

ここからはこの報告書の総括に入っていきたいと思います。いろいろとトルコでの楽しかったことや悔しかったことについて話しましたが、今この10か月の海外留学を経た上で強く思うことは「どんな形であれ海外に関係のある将来にしたい」ということです。あ

りきたりであるとは自分でも感じますがそれでも、これが私が海外留学を経て手に入れられた気持ちです。正直に言えば、まだ自分の英語力にはまったくもって納得がいていません。友人との会話のレベルももっと深い話や、もっとくだらない話ができるようになりたいし、授業でもリスニングや、スピーキングももっと上達したい気持ちです。この悔しい思いがあるからこそ、将来必ずどこかでリベンジをしたいと考えるし、そのためにまだまだ英語学習も区切りをつける気はありません。また友達付き合いの中で感じられた『海外』の近さ」も将来海外に携わりたいという気持ちの大きな理由です。

留学でこのような大きな功績を持ち帰ってきた、というわけではありませんがこの海外留学は私の将来への気持ちに大きな影響を及ぼす、とても貴重で大切なものであったと私は強く思います。